



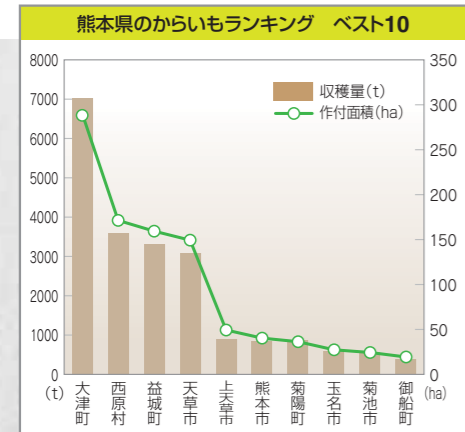
昭和13年から平成16年まで操業していた
アルコール工場

主で、市場にはあまり出していなかった。しかしアルコール工場が操業を開始すると、からいもの需要が上がり生産量が増加することになった。アルコール工場が大津町に立地したこと、大津町のからいものは県内有数の産地となったのだ。

第一次世界大戦後、石油の需要は急激に増大し、石油不足は経済や軍事上の弱点となっていた。しかし日本の石油資源は皆無に等しく、輸入に頼らざるを得ない状態だった。昭和6年の満州事変を契機に代替燃料を自給自足することの必要性が訴えられ、昭和12年4月「アルコール専売法」が施行される。この専売制度は、石油資源を持たない日本が自給できる液体燃料としてのアルコールに着目し、大増産を図るためにつくられた。また、製造原料として「からいも」や馬鈴薯などの農産物を

計画的に使用することで農村経済の振興に役立てようとする政策も兼ねていた。そして、全国で13カ所にアルコール工場を建設することになる。工場の立地は「からいも」の生産地で、鉄道など交通の便が良く、水が得やすく、排水が良いという条件があった。県内でも大津のほか八代、泗水などが候補としてあげられていたが、誘致活動が地域をあげて活発に行われた結果、昭和13年から「肥後大津アルコール工場」は操業を開始した。それ以前からいもは、熊本市の工場に焼酎の原料として使用されるのが

からいもと アルコール工場



※平成18年作物統計調査より



人とのつながりに感謝

現在、信一さんの息子である古庄律雄ふるしょうりつおさんが「古庄からいも」を受け継いでいる。祖父の近さん、父の信一さんが持っていた「からいもへの情熱」を持ち、からいもの研究と普及に力を尽くす。親子三代に渡る思いを聞いてみた。



古庄律雄さんと正美さん
今年も収穫の時期がやってきました

受け継がれる からいもへの愛

農家を継いだのも、祖父と父の影響です。親の頑張る姿を見て育ちましたからね。

欲が無く、とても勉強して、一所懸命頑張っていた人たちでした。祖父は、水の少ない平川地区に水を引こうと、自分でボーリングを2回しましたからね。2人ともすごかった。

そして、二人から私はいろんな教えをもらってきました。松田喜一先生の教えも強く残っていますし、泗水町の元町長増田義隆ますだよしたかさんからも教えをいただきました。これも祖父と父のおかげと思っています。

先を明るく照らすために

父は、からいものことを四六時中考えていました。私もいつでも考えていますね。からいもの苗床のつくり方などは独自のやり方を研究していますし、徳島など県外に行って勉強も続けています。

今後は、生産農家が安心してからいもをつくっていただけるように、いろんな底上げをやっていかないとダメだと思っています。

先人たちが作ってきた基礎を感謝しながら、受け継いでいかなければならない。そのためにより一層の努力が必要だと思っています。



大津北中の生徒が職場体験

親子のきずな

祖父や父のプレッシャーですか？それやプレッシャーはありますよ笑。でも、親の人脈があることで多くの人にとっても助けられました。いろんなことは、決して一人でできるものではないので、人とのつながりにはありがたいものです。私には子どもがいますが、長男は大学で農業の勉強をやっていて、少しずつからいも生産の技術を教えていっています。松田先生の「三惚れ」つれあいに惚れる。地域に惚れる。仕事に惚れる」という言葉は、子どもたちにも受け継ぎたいと思っています。

「からいものことは、からいもに聞け。からいもが教えてくれる」と父が教えてくれた言葉があります。からいもは、すぐに答えは教えてくれませんが、これからからいもに聞いて、喜ばれるからいもを家族と一緒に作っていきたいと思っています。